

教育センターだより

平成26年度 第12号(3月12日発行)



鳥取県教育センター 〒680-0941 鳥取市湖山町北5丁目201番地
TEL 0857-28-2321(代表) FAX 0857-28-8513
【URL】 <http://www.torikyo.ed.jp/kyoiku-c/> 【E-Mail】 kyoikucenter@pref.tottori.jp

今年度最終の 土曜自主セミナー を開催しました

2月21日(土)、土曜自主セミナー「授業でのタブレット端末初級活用法」を開催し、本年度教育センターが計画した教職員研修を全て終了しました。

コンピュータ技術の進展に伴い、将来はもちろん、現在も児童生徒が社会でICT機器を利用しないで生活することは難しくなっています。学校でも、今後ますます、学習における、より望ましい形でのICT機器活用が求められます。

当然のことですが、ICT活用教育はICT機器の導入が目的ではありません。近日公表される予定の「鳥取県ICT活用教育推進ビジョン」においては、「21世紀にふさわしい学びにおいてICTを道具として有効に活用する」ということがうたわれています。

そこでこの度、初歩段階を自認する受講者を対象に、ICTをよりよく活用した授業ができるようにと、タブレット端末の活用を具体例とした土曜自主セミナーを開催しました。

当日は、研修企画課ICT活用教育担当指導主事による「鳥取県ICT活用教育推進ビジョン(案)」の概説から始まり、ビジョン案の中でICT活用の「カテゴリA」と呼ばれる、画像や動画を使って伝達効果を高める授業実践紹介のあと、実際に生徒の視点を意識した撮影で折り紙づくりを解説した教材づくりの演習を行いました。

演習では、2人組でそれぞれが作成した動画を6人の班で視聴、決定した各班の代表作を全体会で発表しました。その作業の中で受講者には、どのようなことに気をつけて撮影すればよりよい教材になるのかということについて多くの気づきがありました。

これまでタブレット端末にあまり触れたことがないという方も含め、40名ばかりの受講者が、タブレット端末を使うと教材提示における「拡大」「スチル」「スロー」などが、これまでのデジタルカメラやビデオカメラを使っていた頃に比べ、とても簡単にできるということを実感できた研修でした。



指導主事による説明



グループ活動



代表作発表

次ページに受講者の感想の一部をご紹介します。

【受講者感想の一部】

■ 活用に向けて

- 子どもたちが自分たちでICTを活用し課題を解決していくように、教員もICTを使えるようにならなくてはいけないと思いました。
- ICTを使って資料提示したり、方法を提示することで教師の説明する時間を減らし、生徒の活動時間を増やすような活用を考えたいと思います。
- 生徒作品を見せるだけでなく、教師の意図で写真や資料の見せ方も工夫できるし、生徒の活動の前には生徒目線での作業を見せるなど、難しく考えなくても活用していけると思いました。
- 共通理解の時間の短縮と時間の有効活用につなげたいと思います。
- 今までは前からの映像教材しか見たことがなかったが、生徒目線のものを見せることによって、生徒の理解度が違うことに気づきました。iPadの位置だけでなく、普段から「生徒目線」で授業を考えなくてはならないと思いました。

■ 使ってみれば

- 苦手だからと遠ざけず、人に聞きながらでもタブレットやPCの活用を研究してみようと思いました。
- 授業で使うということに大きなハードルがあるようなイメージがあったが、実際に使えそうなイメージのおく研修でありがたかったです。
- はじめてタブレットに触れました。案外簡単。

■ 教育センターへの要望

- 講座の名前がとてもよかったと思いました。気軽に参加できるので、土曜自主セミナーでどんどん解説してほしいと思います。
- このような研修の続編を自分の学校で受けたいです。
- 初級編に加え、中級編、上級編の講座がセッティングされたらぜひ参加したいと思います。
- 少しずつレベルを上げた研修を継続してほしい。少しずつお願いします。
- センターは最先端の授業の紹介などをしてほしいと思います。

■ 活用アイデア

- その他、受講の皆さんが動画教材として活用したいという内容には、以下のよう
なものが記載されていました。
 - ・作業学習などの手順説明
 - ・毛筆の使い方
 - ・授業の導入のための画像
 - ・球技における動作のポイント
 - ・ギターの実技
 - ・歯磨き指導
 - ・ボタンつけ・スナップつけ(活用方法は、まだいくらでもありそうですね。)

なお、教育センターでは、「出かけるセンター」という指導主事等派遣の取組を行っており、学校等の求めに応じて訪問型の研修講座を開催しています。ICT活用教育もそのメニューの一つとしていますので、ホームページ等で内容をご確認のうえ、学校等での研修にご活用ください。日程等についてご相談させていただきたいと思います。

鳥取・島根連携講座連絡協議会 を実施しました

2月27日（金）、米子市で標記の連絡協議会を実施しました。

この会は鳥取県教育センターと島根県教育センターの間で毎年度末に実施していますが、平成15年6月20日に締結された「鳥取県教育センターと島根県教育センターとの教職員研修における連携講座に関する覚書」に基づき、当該年度における両県連携講座の開催・受講状況や次年度連携できる講座等について協議しています。

平成26年度は、鳥取県が75講座、島根県が47講座を連携講座に設定し、鳥取県からは54名、島根県からは100名の教職員が相互の連携講座を受講しました。

受講者の感想として、

【鳥取県の受講者からは】

- 島根県の先生方と交流できてよかったと思います。
- 鳥取県西部地区の者にとって、島根県教育センターは鳥取県教育センターよりも近くて便利です。
- 教材を持ち帰ることができたり、講座の内容を撮影できたりするのはたいへんありがたいと思います。

【島根県の受講者からは】

- 鳥取県の先生方と一緒に情報、実践を共有できてうれしい。互いに高め合えるよい機会だと思います。
- 鳥取県の研修に県を越えて参加できるようにしてもらって本当にありがたい。たくさん研修機会があると嬉しいと思います。
- たくさん実践例を紹介していただき、大変参考になりました。

などのアンケートへの回答がありました。

連絡協議会では、連携講座の運営に関する協議にとどまらず、来年度以降の両県教育センターの活動をより充実したものとすることを目的として、それぞれのセンターにおける外部機関との連携状況、研修講座開催の工夫、教育相談の実施状況、ICT活用教育の実態などについても分科会形式で情報交換を行いました。



【分科会形式での情報交換の様子】

学級づくり、人間関係づくり

きくんのワンポイントアドバイス

10回目



本年度最後の『ワンポイントアドバイス』は「学級づくり・人間関係づくり」についてのお話です。年度初めの3日間を「黄金の3日間」と呼んだりもしますので、学級づくりのお話をするには今がちょうどよいタイミングではないかと思うのです。

鳥取県でも、ここ数年で、学級づくりのための一つのツールとして、Q-U や hyper-QU を活用される学校がかなり増えてきました。

Q-U、hyper-QU を開発された早稲田大学河村茂雄教授は、学級集団を見る視点として、「ルール」と「リレーション」の二つの軸に基づいた学習集団の型（「満足型」、「ゆるみ型」、「かたさ型」等）を提唱しています。

同時に「学級集団の発達段階」にも目を向け、その段階なりの支援・指導をしたうえで、次の段階へと集団を成長させていくことの大切さを強く唱えています。

「学級集団の発達段階」には次のような段階があるそうです。

- ①混沌・緊張期 ②小集団成立期 ③中集団成立期 ④全体集団・自治的集団成立期

河村氏は、常に満足型で理想の学級へと導いている先生方がどのような支援・指導をしているかを調査し、各発達段階ですべての先生に共通する点があることを示しています。

年度が変わればほとんどの学級が「①混沌・緊張期」からのスタートです。

そこで今回は、「①混沌・緊張期」と次の段階の「②小集団成立期」での、共通した支援・指導の展開についてご紹介します。

①混沌・緊張期（児童生徒同士に交流がなく、学級のルールも定着していない段階）

- (1) 子どもたちの願いを取り入れた理想の学級の状態を確認する。
- (2) 理想の学級の状態を成立させるための学級目標を設定し合意する。
- (3) 学級目標を達成するためにみんなで守るルールを設定する。
- (4) 教師もルールを守る。
- (5) ツールについて具体的なイメージを持てるように説明する。

ただ単に目標やルールを決めるのではなく、(2)の取組をしたうえで、子どもたちといっしょに学級目標やルールづくりに取り組んでください。子どもたちに学級での当事者意識が芽生え、「学級はみんなでつくっていくもの」という意欲もわいてきます。

そうなれば、目標やルールが真に子どもたちのためのものになり、「ルール違反は、みんなの約束を破る行為」という捉えができるようになります。

②小集団成立期（学級のルールが徐々に意識され始め、児童生徒同士の交流も活性化してくるが、その広がりには気心が知れた小集団にとどまっている状態）

- (1) 教師がルールを守っていることを子どもに見せる。
- (2) ルールをきちんと守って行動している子どもを積極的に褒めて、学級内に奨励する。
- (3) ルールが学級に定着するまでのルール違反には、その内容に適切、確実に対応する。
- (4) 生活班、係活動のグループを積極的に活用し、ルールの定着を図る。
- (5) 生活班、係活動の役割活動に対する評価では、プラスの評価は周りから、マイナスの評価は自分から言わせるようにする。

※ このような初期の学級集団づくりに十分取り組んだうえで、Q-U や hyper-QU を実施し、児童生徒の様子を見取ってください。そして、学級担任まかせにすることなく、学年体制、学校体制で取組をすすめてください。

参考文献：「学級づくりのゼロ段階」河村茂雄著 図書文化社

鳥取市教育委員長の柴山抱海師は、書家であり、お寺の住持であり、高等学校で書道を教えていらっしやった。

私は高校生のとき、芸術科目は書道を選択した。抱海師は恩師である。

県外経験を経て、8年目の教諭として私が鳥取県に採用されたとき、配属された学校で大先輩の教員としても長年教えてくださった。その意味では二重の恩師である。

同一校で勤務させていただいた最後の一年間、再び書道を教えていただいた。今考えると慚愧に堪えないが、軽い気持ちで、「小筆で葉書が書けるようになりたい」とお願いしたところ、「普通の筆が扱えないと小筆も扱えない」と諭され、しばらくの間、夜は家で宿題の文字を書き、昼休憩に抱海師のお城である書道準備室で添削していただくという、私としてはたいへん予想外の、しかし極めて有意義な展開になってしまった。

*

ある日、抱海師が「墨を擦っているとおなかの調子がよくなる。」とおっしゃったことがある。何だかごろごろおなか動いて調子がよくなるそうだ。

ちょうど自律訓練法のことを学んだところだったので、「集中でしょうか。集中して無心になると大脳新皮質が眠り、本能的なものが解放されて、心にも体にもいいですよ。」と、知ったかぶりの返答をしたことがあった。

*

またある日、「仏に対していると心がほどけてくるから『ほとけ』と言うのじゃないかと考えている。」とおっしゃったことがある。

虚を突かれた気がした。同音異義語ではないが、ある言葉の意味をその語の読みと似た音を使って解釈するという発想が面白いと思った。

*

それが無意識下に沈潜していたのだろうか。

あるときふと、「別れ」という言葉は、「我々」として仲間だった者が「我」と「彼」に別れるから、「われかれ」つまり「わかれ」と言うのではないかという考えが私の頭に浮かんだ。

語源的にはきっと間違っている。しかし、「我」と「彼」説を自分では何だが気に入っている。

それまで「我々」として甘えていた仲間と、明日からは「我」と「彼」になり、もう甘えることはできない。

「別れ」とは、そういう厳しい意味をもつ言葉なのだと思う。

その意味では普段から、いつ目の前の人がいなくなっても、あるいは自分がそこから去ってもいい、つまり「我」と「彼」になってもいい、という心構えで周囲の人と接し、学んでおかなければならないのだろう。

そう考えるとやはり、「別れ」とは厳しく、畏ろしい言葉だ。

*

私の書道準備室通いは、ほぼ1年で終わりを迎えた。私が次の勤務校に異動してしまったからだ。だから私は今でも筆を吊って文字を書くことができないし、小筆で葉書も上手に書けない。

*

ところで、私はそろそろ「我」に帰る。

私がこれまでずいぶんと甘えてお世話になり、ご迷惑をおかけしてきた皆さん、ありがとうございました。

さようなら。お元気で。

